

事後評価報告書

CONCERT-Japan プロジェクト(欧州連合(EU)との日本-EU 共同研究)「災害に対する回復力」領域
(支援期間:平成 25~26 年度)

1. 研究課題名:「災害復興を目的としたリモートセンシングと空間情報技術による被災情報図の即時作成と配信 RAPIDMAP」

2. 研究代表者名:

日本側: 東海大学 情報理工学部 教授 長 幸平

相手側: スイス連邦工科大学 上席研究員 Emmanuel Baltsavias(スイス)

ブルーノ・ケスラー財団(FBK) 主任 Fabio Remondino(イタリア)

ダムスタット工科大学 測地学研究所 教授 Uwe Soergel(ドイツ)

3. 総合評価: A

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

本研究は、地球観測衛星や小型無人航空機による被災地の画像を迅速に処理・解析し地図化して、被災地の救援チームなどに速やかに情報提供するシステムの構築を目的としている。本研究では、河川沿いの堆積物や倒壊家屋等の自動抽出システムの開発などを行い、被災情報図作成のための世界最速処理システムを開発できた点は具体的な成果として評価できる。研究成果の発表は、プロシーディングスが主であるが、国際誌も含めて 5 編の共著論文が発表されたことは、日本、ドイツ、スイス、イタリアの研究機関がそれぞれの強みを生かして、一つの大きな目標を共同で達成した大きな成果であるといえる。但し、各国の研究機関の強みを総合化する計画については、現時点でどの程度、相互的に取り組み、より良いシステムを構築できたかについて、もう少し踏み込んだ説明が望まれる。

(2)交流活動の評価について

活発な研究交流がなされ、プロジェクト終了後も共同研究の継続などが予定されている。また、数多くの大学院生が研究に加わり、研究成果を挙げるとともに研究報告を行うことにより、若手研究者が育成されたことは意義がある。約 100 名の参加者からなる成果報告会を東京で開催し、研究成果を国内へ普及に努めた点も評価できる。一方、日本側からは数名の渡航実績に留まったことは残念であり、国際交流を通じて日本の若手研究者の育成を図るという意味では、若干低調であったと思われる。

(3)その他

各国の役割分担が明確であったこと、それらを総合化して最終的な成果に結びつける取り組み、独自のワークショップ等に加えて学会のセッション等を利用して幅広い成果普及につなげていたことは高く評価できる。